

広報

あしや

931号

令和元年 (2019)

6月1日



ノコッダ!
ノコッダ!



寄添者 よそもん

よそもん
寄添者とは、「人」に「町」に「心」に寄り添いたい者という意味です。

芦屋町の美しいロケーションにひかれて

自然素材化粧品製造販売会社を営む金井誠一さんは、原材料から完全無農薬の製品を作るために芦屋町へ移転してきた寄添者です。金井さんが芦屋町を選んだ最大の理由は美しい海岸線を一望できる景観の良さでした。工場が建てられるのか、ハーブ園ができるのかわからない状態でしたが、直感で芦屋町に行こうと決めたそうです。

オーガニック化粧品製造の研究を進めるなか、町内で赤シソを栽培しているあたか農園と出会い、無農薬の栽培を依頼することに。そして、赤シソのエキスが防腐剤の役目を果たす化粧品や石けんを作ることができました。その赤シソプロジェクトは農商工連携事業として国から認定されました。



△上空から見た工場の外観



△熟成中の無農薬石けん



△ラベンダーなどのハーブ園

芦屋町地域おこし協力隊卒業後の寄添者コーナー。今年度は、芦屋町に魅せられ引き寄せられた皆さんに、寄添者視点からの魅力などをうかがっていきます。

▷問い合わせ 広報情報係

(☎223局3569)



金井誠一さん
パルセイユ株式会社代表

紀元前から脈々と続く土地の力を感じて

町に来てまず感じたのは、土地の持つ力のすばさだそうです。紀元前から人が生活していた豊かな土地と長い歴史の中で培われてきた文明・文化は、さらに本業に影響を与え続けます。

オーガニックの飲食店経営を始めるにあたり、目の前に広がる美しい海から塩はできないかと考えます。当初、地元の吉田漁師からはできないと言われたそうですが、調べてみると過去に塩田があったことがわかり、芦屋産の塩の製造が始まりました。

また、町が誇る「芦屋釜」を復元した鋳物師に出会い、さっそく芦屋釜を注文し、貴重な釜を手に入れました。その茶釜の居場所として、ハーブ園の隣に茶室までかまえたのです。

芦屋の縁が次々につながって新たな発展へ

最近では、創作菓子ブランドも立ち上げることに。金井さんのこだわりは、地元産です。赤シソと塩などをブレンドした和風チョコレートは、芦屋鋳物師デザインの鋳型により縁起の良いひょうたん型となって誕生しました。菓子製造によって新たに雇用も拡大した金井さんは、「地元の縁を大切に、これからも地域経済の活性化につなげたい」と意欲を示しています。

編集後記

▼春の運動会シーズンも過ぎ、すでに気温が30度と真夏日を記録するような春が終わろうとしています。今年も暑くなる夏に向けて皆さん対策は考えていますか。日差しの下で活動する事の多い私は、暑さに慣れていたはずなのに、年々対策無しで活動することが危険なんだと感じるようになってきました。熱中症対策として、水分補給には十分に注意しています。ただ飲むだけでなく、汗で出る電解質が入っている事やカフェインが入っていないことなど、意識して体調管理をしながら今年も夏を乗り越えたいと思います。(鮎島)

▼過ごしやすい気候から次第に湿度の高い気候に変化してきました。近年の大水害が発生する環境に近づいているということですから。命を守るための準備は台風発生や大雨が降り始めてからでは間に合わないことがあります。よい天気が続いているうちに、自分に必要な最小限のものを準備しておきましょう。私も準備をします。それから、今号から「寄添者ですがなにか!」がちよつと変わりました。町外から移住してきた人や働きに来ている芦屋愛にあふれる人を紹介してください(自薦他薦可)。(鉄守)

この広報は、再生紙を使用しています。